

謝靈運「江中の孤嶼に登る」の「江南」「江北」
—その詩語としての意味—

佐竹 保子

“Jiang nan” and “Jiang bei”
in Xie Lingyun’s *Deng Jiang Zhong Guyu*

SATAKE Yasuko

摘要

《李善注文选》第26卷所收谢灵运《登江中孤屿》诗初联“江南倦历览，江北旷周旋”，清代以来被认为是“作者”实际经过的路程，但是实际上“江南”和“江北”都是拥有典故的诗语。“江南”，《楚辞》以来用例很多，其含义有时是灵魂不可归的地方，有时是多种名产的产地，有时是恋歌的题名等等。与此相反，“江北”用例少，其含义就是灵魂可归的地方。《登江中孤屿》诗中，其主人公厌“倦”“江南”而去“江北”，他到了“江北”以后才能发现“江中孤屿”，它就是“灵”和“真”所在。

诗中“江南”和“江北”不仅仅是单纯的地名，而更是诗人以它们作为含义丰富的诗语，配在诗中应有的地方。

キーワード：謝靈運 江中の孤嶼に登る 江南 江北 詩語

一 はじめに——問題の所在

『文選』（5世紀）に収められる謝靈運（385～433）の「江中の孤嶼に登る」詩¹⁾は、拙前稿に述べたように²⁾、その初聯について、二種類の解釈がなされてきた。初聯を同対や互文とみる解釈と、対蹠的な反対とみる解釈である。

拙前稿では、後者を採るべき旨を述べた。だが、歴代後者を主張してきた論の中に、いささか不審な点が含まれていた。小稿はその点を取り上げて、内実を考察する。考察によって、当該詩の読みをさらに深めることが、期待されるからである。

二 「江中の孤嶼に登る」初聯に対する従来解釈

最初に、「江中の孤嶼に登る」を掲げる。訳は、前稿までの検討結果を踏まえている。

江南倦歴覽、	川の南はうんざりするほどめぐり見た
江北曠周旋。	川の北ははるかにめぐりゆこう
懷新道轉迴、	目新しさを慕って道はますます続き
尋異景不延。	珍しさを尋ねるが日脚は伸びない
亂流趨正絶	流れを渡ってちょうど絶える所に趨けば
孤嶼媚中川。	ぼつんとそびえる島が川の半ばにうるわしい
雲日相輝映、	雲と太陽が輝いて映じあい
空水共澄鮮。	空と水がともに澄んであざやかだ
表靈物莫賞、	霊妙さを表わしても賞する者は無く
蘊真誰爲傳。	真実を包みもっても誰が伝えよう
想像崑山姿、	想像するのは崑崙山のすがた
緬邈區中縁。	遠ざかりゆくこの世のえにし
始信安期術、	始めて信じた 仙人安期生の術が
得盡養生年。	いのちを養う日々をまっとうさせることを

初聯「江南は歴覽に倦む、江北は曠かに周旋せん」は、前稿に示したように、人為の過剰／人為の稀少、倦怠／憧憬、過去／未来、事実／願望、という複数の対立軸を含む。この対立軸に早くから着目していたのが、清代の呉淇（1615～1675）である。だが呉淇は、同時に次のように記す。

先に江南に遊んでから、江北に遊んだのではない。先に江北に遊んでから、江南に遊んだ。江南に倦んでしまったので、むかし遊んだ江北を思いだしたのだ。江北の山水は私と久しくつきあってきたのだが、今久しく遊ばず、友人が久しく疎遠になったかのようなだった。そこで船を戻して江北に遊ぼうと、川の中の乱流正絶の所に行った。（非先遊江南、方遊江北。正先遊江北、方遊江南。江南既倦矣、乃迴想我昔遊江北。江北山水與我周旋久矣、今久不遊、若朋友之久曠然。於是又欲返棹遊江北、適於江中亂流正絶之處）³⁾

現代の研究者も、これを承ける。たとえば鄧魁英氏はいう。

「曠周旋」は、久しく遊覧しないこと。曠は、おろそかにする、遅らせる。周旋は、応接する、つきあう、ここでは、以前に行つて観賞したことを指す。この二句は、

永嘉江の南岸はすでに何度も行って観賞したが、江北には久しく行っていないことを言う。(旷周旋：久不游览。旷，荒废，耽搁。周旋，应酬，打交道，这里指前去游赏。这二句是说永嘉江的南岸已经游赏多次，而江北却很久没去了)⁴⁾

顧紹柏氏はいう。

曠は、廢める。周旋は、現代語のぶらつくに似る。この句は、むかし江北に遊んだことがあるが、今はもう長い間行っていないことを言う。(旷，廢。周旋，犹今言转游。这句是说，过去游过江北，现在已是有好长时间没去了)⁵⁾

沈玉成氏はいう。

「江南倦歴覽、江北曠周旋」とは、あたかも作者がまだ江北に行ったことがなく、突然行きたい気分が萌したかのようだ。しかし実は、作者は江北から江南に入ったのであり、ただ当時は江南の景色を観賞するのに気がせいて、忽々に江北をなおざりにしてしまった。いま船を戻して、再び江北に向かう。江の景色に眷戀するこうした深情が、生き生きとした脱俗の精神を示している。(“江南倦历览，江北旷周旋”，好像作者从未到过江北，突然萌动了游兴。其实作者是先由江北而入江南的，只是当时急于欣赏江南景致，匆匆之间反而疏忽了江北，如今重返征棹，再向江北。这种缱绻于一江景色的深情，为我们展示了一种活跃脱俗的精神面貌)⁶⁾

呉淇の論は、上記三氏の淵源となっている。その呉淇論に、不審と思われる点が三つある。

一つは、「今久しく遊ばず、朋友の久しく曠然たるが若し」と、詩二句目の「曠」を、交遊を「曠」^かく、廢する意にとること。鄧氏も「曠は、荒廢なり」、顧氏も「曠は、廢なり」、沈氏も「江北を疏忽にせり」とする。この「荒廢」「廢」「疏忽」という「曠」解釈が、謝靈運詩文の用いる「曠」の含意にそぐわないことは、前稿に述べた。

二つには、「朋友の…若し」と、「周旋」を「朋友」との交際に重ねることである。鄧氏に至っては「周旋は、応酬^{こうさい}なり、交道^{つきあう}なり」と明言する。詩の「周旋」の含意はより重層的なものと思われるが、紙幅の関係もあり、その検討は別稿に譲る。

三つには、「先に江南に遊び、方めて江北に遊ぶに非ず。正しく先に江北に遊び、方めて江南に遊ぶ。江南は既に倦きたれば、乃ち、我れの昔し江北に遊びしを迴想す。江北の山水、我れと周旋すること久しきも、今久しく遊ばず」とすることである。詩二句目の「江北」は、一句目の「江南」よりも「先」に「昔」に遊んだのであり、二句目は「我れの昔し江北に遊びしを迴想」した結果の句とされる。ゆえに「江中の孤

嶼に登る」詩は、「江北」に二度目に遊んだときの作ということになる。この解釈は果たして妥当なのか。

三 初聯の「江南」「江北」に対する従来の解釈

「登江中孤嶼」の初聯を再掲する。

江南は歴覽に倦む、江北は曠かに周旋せん。(江南倦歴覽、江北曠周旋)

前章に記したとおり、呉淇は、二句目の「江北」を、一句目の「江南」より「先」に遊んだ地とする。

呉氏を承ける鄧魁英氏も「こ這里は、い前に去きて遊賞せしことを指す」と記し、顧紹柏氏も「過去に江北に遊び過も、現在はす已是に好と長き時間去かずなりゆき了」、沈玉成氏も「其の実、作者は先に江北由り江南に入るもの的なり、只だ当時江南の景致を欣賞するに急き、匆匆の間に反って江北を疏忽にせり。如今重ねて行く棹を返し、再び江北に向かう」という。諸氏の説に従えば、上掲した初聯は、「先に江北に遊」んだが「江南の景致を欣賞するに急」いて「江北」に「久しく遊ばず」、「如今重ねて行く棹を返し、再び江北に向かう」趣旨を詠じたことになる。

詩の「江南」「江北」の「江」は、李善注によれば「永嘉江」を指す。永嘉は、当時の都の建康や、謝靈運の莊園のあった始寧の、さらに南に位置している。それゆえ謝靈運が永嘉に行くなら、永嘉江の北から南へと渡ることになる。呉氏が「先に江北に遊び」とし、沈氏が「其の実、作者は先に江北由り江南に入るもの的なり」とするのは、右の地理的事情を踏まえる。

しかし、上掲したように初聯は「江南は歴覽に倦む、江北は曠かに周旋せん」である。「江南」に「倦」んで、これから「江北」に行こうとしている。現実の謝靈運の足取りを考えれば、「江北」から「江南」へとなるはずであるが、初聯は「江南」から「江北」へと詠じている。この矛盾をどうするか。矛盾を解消するための理屈が、沈氏のいう「当時江南の景致を欣賞するに急き、匆匆の間に反って江北を疏忽にせり。如今重ねて行く棹を返し、再び江北に向かう」であろう。「江北由り江南に入」った「作者」が、「当時」「江南の景致」に「急」いていたために、「江北」を「疏忽」にしたのだと、「当時」の「作者」の心情まで憶測する。以上いずれの説も、「作者」の現実の行程を辿ろうとする意図から出ている。

しかし、該詩初聯の「江南」「江北」は、そうした「作者」の行程を即物的に記したのか。「江南」「江北」の持つ詩語としての語感を、閑却できるのだろうか。

四 謝詩までの江北の含意

「江南」は、五経には『春秋左氏傳』に3例、十三経に範囲を広げても同数である⁷⁾。「江北」は見あたらない。もとより「江南」「江北」とも、『詩經』には無い。詩賦のもっとも古い「江南」は、『楚辭』「招魂」(『文選』卷33)の「乱」^{おさま}に登場する。

「乱」の「吾」は、早春、カリヤスやウキクサが葉を揃え花ウドが芽吹く中、南へと急いでいる。王逸(2世紀前半)の注に拠れば、楚の都の郢を追放された屈原が、ひとり南に下るのである。湖沼地帯に至りはるかに見わたせば、過去の幻影が浮かんでくる。楚王の「夢」沢での狩りのさまである。漆黒の馬を繋いだ四頭だての馬車が千台も並び、あたりは夜の闇、かがり火が天を焦がしている。「吾」は、王を先導して獸を追いこむ。王がみずから矢を放ち、青兕獸を驚かせる⁸⁾。しかしそれらはすべて過去のこと、失われた日々は二度と戻らない⁹⁾。こうした詠出を結ぶのが、次の二句である。

目極千里兮傷春心。 目は千里を極め、春の心を傷ませる
魂兮歸來哀江南。 魂よ帰り来たれ、江南は哀しい

先述のように王逸に拠れば、「乱」の登場人物は屈原であり、末句の「魂」は屈原の魂である¹⁰⁾。「乱」の魂は、江の南をさまよっている。その魂の「帰來」すべき場所は、楚の都の郢である。郢は、長江の北にある。それゆえ上引二句は、「江南」に居ても「哀」しいばかり、だから江北に帰り来たれ、と歌いおさめるのである。王逸も次のように付注する。「言うところは、魂魄当に急ぎ来帰すべし。江南は土地僻遠、山林險阻にして、誠に哀傷すべく、処るに足らざるなり」(言魂魄當急來歸。江南土地僻遠、山林險阻、誠可哀傷、不足處也)。

掉尾の「魂よ帰り来たれ江南哀し」は凝縮された句で、「帰來」する先が記されない。だがそれが「江南」に対する「江北」であることは見やすい。句は「江南」の語を織り込みつつ、「帰來」すべき「江北」を暗示している。

「招魂」の「乱」の詩意を承けつぐと考えられるのが、曹植(192~232)「雜詩」六首の四(『文選』卷29)である。

南國有佳人、 南国に佳き人がいる
容華若桃李。 ^{すがた}容の華やぎは桃や李のよう
朝游江北岸、 朝には長江の北岸に遊び
日夕宿湘沚。 夕には湘水の水辺に宿る
時俗薄朱顏、 世俗はバラ色のかんばせをうとんじる
誰爲發皓齒。 誰に白い齒の笑みを見せられよう

俛仰歳將暮、 またたく間に歳は暮れかかり
榮耀難久恃。 耀さも長くは持みがたい

全八句のうち、一句目の「南国」「佳人」、五句目の「朱顔」、六句目の「皓齒」が、『楚辭』に由来する。李善注によれば、「南国」は九章「橘頌」の「命を受けて遷らず、南国に生まる」（受命不遷、生南國兮）、「佳人」は九歌「湘夫人」の「佳人の予を召すを聞く」（聞佳人兮召予）、「朱顔」は「大招」の「容則是秀雅に、穉き朱顔なり」（容則秀雅、穉朱顔只）、「皓齒」も「大招」の「朱き唇 皓き齒、みめよ嫿うつくく以て姸し」（朱唇皓齒、嫿以姸只）にもとづく。末句の「榮耀」は、辺讓（2世紀後半）「章華台の賦」（『後漢書』列伝70下文苑伝下辺讓伝）の「体は軽き鴻より迅く、榮やぎは春の華より曜く」（體迅輕鴻、榮曜春華）が出典であるという。「章華台の賦」は、「楚の靈王」が「雲夢沢に遊」んで「章華台を作」り、「長夜の淫宴」「北里の新声」に溺れていくのを、臣下の「伍挙」が諫めて詠じた、という設定になっている。賦中には「兮」を用いる楚辭体が織りこまれている¹¹⁾。すなわちこれも、『楚辭』に関わる作である。

曹植詩の上記以外の出典は、李善注に拠るかぎり、「桃李」「沚」「歳將暮」が『毛詩』にもとづくのみである¹²⁾。

つまり曹植「雜詩」六首の四は、随所に、『楚辭』および『楚辭』に関わる作の詩語を用いている。加えて「南国」の「佳人」が「時俗」に「薄」んぜられ、その美を「発」わす相手もないという不遇と、「歳將に暮れんとす」という衰暮の嘆きも、前掲した「招魂」の「乱」に似る。

これらを踏まえ、再度曹植詩二聯目の「朝に江北の岸に遊び、日夕に湘沚に宿る」を見よう。上句の「江北」は、楚の都の郢があった地である。下句の「湘」水は、長江の南、すなわち江南を流れている。両句冒頭の「朝」「夕」は必ずしも一日を単位とせず、一生の「朝」「夕」でもある。そうとすれば、若き日に「江北の岸に遊び」、最期に江南の「湘沚に宿る」者は、「招魂」の「乱」に「魂よ帰り来たれ江南哀し」と呼びかけられる屈原の「魂」に重なる。

上の曹植詩以後、謝靈運「江中の孤嶼に登る」より以前に「江北」を用いた作は、現存する詩賦では、「雜曲歌辞」の古辞「西洲曲」（『樂府詩集』卷72）一篇に止まる。その初二聯を挙げる。

憶梅下西洲、 梅を憶おもって西洲に下る
折梅寄江北。 梅を折りとり江北に贈る
單衫杏子紅、 ひとえの衣はアンズの紅
雙鬢鴉雛色 ふたつの鬢は子ガラスの色

初聯、梅の咲く西洲の下流から、まだ咲かない「江北」へと梅の枝を「寄」せる。花の枝を寄せるのは、古来、いとしい人への愛のあかしである¹³⁾。次聯はその人を描く。アンズ色の衣に、カラスの濡れ羽色の髪を持つという。二句目の「江北」は、この恋歌をうたう旅人の故郷で、いとしい人の待つ地であろう。さきの「招魂」「乱」の「江北」が、魂の帰るべき場所であるのに通じている。

以上が、謝靈運以前の現存詩賦に見える、僅かな「江北」の例である。これに対し、「江南」の用例は多い。

五 謝詩までの「江南」の含意

前章冒頭に挙げたように、現存詩賦で「江南」の最古の用例は、『楚辭』「招魂」の「乱」にあった。続く例は、紀元前1世紀の王褒「洞簫の賦」(『文選』巻17)の冒頭である。

原夫簫幹之所生兮、 かの簫の幹が生えていたのは
于江南之丘墟。 江南の丘でありました

以下、江南に生えていた竹は、洞簫の笛となり、皇帝のもとに運ばれる(「幸いにも謚を得て洞簫と為り、聖帝の渥い恩を蒙る。その悲しい音色には、すべての者が涙を流し(「其の悲声を聞けば、則ち愴然と歎きを累ね、涕を撇い涙を^{はら}ぬぐ^{ぬぐ}わざる莫く)、楽しい演奏には、すべての者が喜びくつろぎ(「其の歡娛を奏せば、則ち憚漫衍凱として…))、人はもとより虫けらに至るまで(「是を以て蟋蟀^{はら}蛸^{ぬぐ}も…))、目を見はり眩き、食べることさえ忘れてしまう(「瞪瞶として食を忘る。))。かくて「江南」の竹は、稀代の名器となるのである。

江南の産物を名品とする詠みぶりは、曹植や張載(3世紀)にも見られる。曹植「洛神の賦」(『文選』巻19)の主人公は、洛水の女神との別れにあたり、「江南の明璫」を贈る。

悼良会之永絶兮、 悼まれるのは良き出会いが永遠に絶たれること
哀一逝而異郷。 哀しいのはひとたび去れば住む世界の異なること
無微情以效愛兮、 愛を届ける寸志とて無いが
獻江南之明璫。 (せめて)江南の真珠の耳飾りを献げます

張載の韻文(『初學記』巻28)は、「江南の郡蔗」を「殊に美しく絶^{はなは}だ快き」品の一つに挙げる。

江南郡蔗、	江南の郡蔗
張掖豐柿。	張掖の豊柿
三巴黃甘、	三巴の黄甘
瓜州素柰。	瓜州の素柰
凡此數品、	すべてこの数品は
殊美絶快。	殊に美味で際だってさわやか
渴者所思、	のどが渴けば思いうかび
銘之裳帶。	裳や帯に記すほど

上引二句目の「張掖」は今の甘肅省張掖、三句目「三巴」は四川省の東半分、四句目「瓜州」は甘肅省敦煌である。「豊柿」「黄甘」「素柰」は、それぞれ大きな柿、褐色のミカン、白いリンゴだが、あるいは特産物の固有名詞かもしれない。一句目「江南の郡蔗」とは、江南の産する「蔗」、すなわちサトウキビの一種で、四品の筆頭に挙げられている。

「江南」は、それを題に冠する歌もある。『宋書』巻21 樂志の収める「相和歌辞」の相和曲「江南」である。

江南可採蓮。	江南では蓮が採れる
蓮葉何田田。	蓮の葉はどこまでも青々と
魚戲蓮葉間。	魚が蓮の葉の間に戯れる
魚戲蓮葉東、	魚が蓮の葉の東に戯れ
魚戲蓮葉西、	魚が蓮の葉の西に戯れ
魚戲蓮葉南、	魚が蓮の葉の南に戯れ
魚戲蓮葉北、	魚が蓮の葉の北に戯れ

「蓮」は「憐」(いとしい人)の双関語である¹⁴⁾。また「魚」は、「匹配」「情侶」の「隠語」であると、聞一多氏がいう¹⁵⁾。一見童謡のような「江南」だが、じつは葉叢に戯れる恋人たちの愛の歌である。

上記「江南」と同じく、3世紀の傅玄の作とされる「歌」(『藝文類聚』巻82)や「清商曲辞」の「桃葉歌」(『樂府詩集』巻45)も、恋歌であろう。傅玄「歌」は、初句に「江南」がある。

渡江南、	江南に渡り
採蓮花。	蓮の花を採る
芙蓉増敷、	芙蓉は数を増し

擘若星羅。 かがや 擘つらいて星の羅なるよう
緑葉映長波。 緑の葉がはるかな波に映える
迴風容與動纖柯。 めぐる風がゆるやかに細い茎を動かす

他方、「桃葉歌」の「江南」は、その末句にある。「桃葉」は、『樂府詩集』所引「古今樂録」によれば、王猷之（4世紀後半）の妾の名という。

桃葉復桃葉、 桃葉よ 桃葉よ
渡江不待櫓。 江を渡るに櫓を待たぬ
風波了無常、 風波はほんに常ならず
没命江南渡。 命果つるは江南の渡し

桃葉なる女性に会いたいあまり、櫓のない舟で川を渡り、時ならぬ風波に溺れ死んだ男の物語である。あるいは「桃葉会いたや、命もいらぬ」と男たちが唱和する、舟こぎ歌であったかもしれない。

「江南の歌」は、謝靈運詩にも出てくる。謝靈運が「江南」の語を用いた二篇のうち的一篇、「道路に山中を憶う」（『文選』巻26）である。初三聯にいう。

采菱調易急、 「采菱」は調べが急きやすく
江南歌不緩。 「江南」は歌が緩やかならず
楚人心昔絶、 楚の人は心がむかし絶たれ
越客腸今斷。 越の旅人は腸がいま断たれる
斷絶雖殊念、 断腸と絶望と念いは別だが
俱爲歸慮款。 とともに帰心にさいなまれて

上の詩に、五臣の呂向が「臨川郡に往き、始寧の山中を憶う」と付注している。謝靈運が臨川内史に左遷された時、赴任の途次に、ふるさとの始寧の莊園を憶って作ったという。たしかに六句目に「俱に帰慮の為めに款たかる」、九聯目には「故きを懐おもいて新たに歡がたび巨く、悲しみを含みて春の暖かきを忘る」（懷故叵新歡、含悲忘春暖）とある。旅人の懷郷の詩であることは間違いない。

上引初句の「采菱」に、李善は『楚辭』「招魂」の「涉江・採菱、楊荷を発す」と、その王逸注の「楚人の歌曲なり」を引く。「招魂」は先述のように、屈原の魂を招くうたである。李善所引の句に先だって「帰り来たりて故なつかしき室かえに反らば、敬おしみて妨わがわい無からん」（歸來反故室、敬而無妨些）とあり、魂を「故室」に誘おうとする。「故室」には美味や「女樂」が準備されている（肴羞未通、女樂羅些）。「女樂」の歌姫ら

が、「楚人の歌曲」である「涉江」「採菱」「楊荷」を歌うのである。

上引次句の「江南」には、注に「古楽府の江南の辞に曰く、江南に蓮を採るべし」とある。二聯目の「楚人」「越客」は、「楚人は、屈原なり。越客は、自らを謂うなり」と付注されている。

上引初句で、楚の歌の「採菱」が「急」わしげに奏でられる。三句目には、それを聞く「楚人」すなわち屈原が登場する。彼は都を追放されてさまよい、「採菱」を耳にして「心」が「絶」える。それは「昔」のことであった。その「昔」の「採菱」と「楚人」に、二句目と四句目で、「今」の「江南」と「越客」が重ねられる。「江南」の「歌」も「緩」やかでなく、それは「越客」すなわち謝靈運の、「腸」を「断」つ。「江南」は「越客」の「断」「腸」の「歌」である。

謝靈運と同時期の、もう一人の謝氏にも、「江南」の語を用いた作がある。謝靈運の「従兄」謝瞻（387～421）が、義熙十一年（415）に作ったとされる「安城にて靈運に答う」（『文選』巻25）である¹⁶。李善注や正史によれば、謝瞻は義熙十一年正月に安成侯国の「相」（国主に代わる執政官）となり、夏に謝靈運から詩を贈られ、冬にその答詩を書いた¹⁷。詩の十三聯目にいう。

幸會果代耕、 幸いにも耕作に代わる禄を頂くこととなり
符守江南曲。 地方長官の割り符で江南の隈を守っている

下句の「江南曲」（江南のすみ）とは、謝瞻が「相」をつとめる安成侯国を指す。「曲」に謙遜がこめられるだけで、この「江南」に微妙な含意は読みとりがたい。

以上をまとめれば、「江南」はまず「招魂」の「乱」で、魂の居るべからざる所とされ、ついで王褒・曹植の賦や張載の韻文で、名品を産む豊かな地とされ、相和歌辞「江南」や傅玄「歌」や清商曲辞「桃葉歌」では、「蓮」と結びつく艶っぽい恋の舞台として詠みこまれた。そして謝靈運「道路に山中を憶う」では、「江南」の「歌」が、旅人を断腸せしめる。他方「江北」は、「招魂」の「乱」で魂の帰るべき所と暗示され、曹植詩や雑曲歌辞「西洲曲」の「江北」にも、その暗示は揺曳していた。

六 「登江中孤嶼」における「江南」と「江北」

「江中の孤嶼に登る」の初聯にもどる。

江南は歴覽に倦む、江北は曠かに周旋せん。

前二章での検討をかりに考慮に入れず、字面のみを追うとしても、「南」には明るい開放性が、「北」には清爽さと鋭さを感じられる。発音も、「南」は平声で、柔らか

い鼻音の n に、大きくあごを開く母音 a が続き、ふたたび m の鼻音で閉じられる¹⁸⁾。これに対し「北」は入声である。唇を閉ざす破裂音の p に、狭めで前寄りの母音 e が続き、鋭い k が音を断ち切る。「南」「北」の発音は、柔らかな開放性と鋭い断絶性との、対蹠をなしている。

古典の読み手であれば、上記の語音の印象に、前二章で検討したような語意の蓄積を重ねることとなる。すなわち「江南」は、豊かな銘品を産し、艶っぽい恋歌が響く地であり、謝霊運にとっては心を動揺させる「歌」でもある。同時にそこには、『楚辭』「招魂」の、魂の居るべからざる場所という通奏低音が流れている。

他方「江北」は、「江南」のような豊かな語感に乏しい。しかし『楚辭』の読み手であれば、「江北」は魂の帰来すべき地という含みを持つことになる。

該詩初句「江南は歴覽に倦む」は、それほど豊かで艶っぽく、魅惑的な「江南」に、それでも「倦いた」という。ついで「江北は曠かに周旋せん」と、詩語としては「江南」ほどなじみのない「江北」が登場する。そのなじみの薄さが、次聯の「新」と「異」を導きだす。次聯にいう。

新を懐いて道は転た廻かに、異を尋ねて景は延びず。

詩の主人公は「江北」に、「新」と「異」を求めて「道」をたどり「景」を追う。そして「江北」にかすかに揺曳していた、魂の帰来すべき地という含意が、三聯目の「孤嶼」で膨らみだす。

流れを乱りて正絶に趨き、孤嶼中川うるわに媚し。

その含意は、四・五聯目で、まばゆく花開く。

雲日相い輝映し、空水共に澄鮮なり。

靈を表して物に賞する莫く、真を蘊みて誰か為めに伝えん。

「中川」の「孤嶼」に、「雲」と「日」が輝き映え、「空」と「水」が鮮やかに澄みわたる。主人公はなじみ薄い「江北」の地に、「靈」と「真」を見出す。それは誰も「賞」し得ず「伝」え得ない光景であり、自分だけが目の当たりにしている。彼は感じるだろう、こここそわが魂の居るべき地だと。

詩の「江南」「江北」は、上の文脈で配されていると考えられる。これが次の語順なら、どうか。

江北は歴覽に倦む、江南は曠かに周旋せん。

再三記したように、「江南」は「江北」よりも詩賦によく登場する。豊かで艶っぽい、感情を揺り動かす魅惑の地である。上の語順では、詩の主人公は「江南」を「曠かに周旋」して「孤嶼」を見出すことになる。しかしなじみ深い魅惑の「江南」に、「物に賞する莫く」「誰か為めに伝えん」という孤高の「孤嶼」は、存在しがたい。「孤嶼」は、「江北」にあるのがふさわしいだろう。

「江南は歴覽に倦む、江北は曠かに周旋せん」の「江南」と「江北」は、謝靈運の現実の足取りとしてではなく、詩語として、詩の文脈の必然として、配されていると考えられる。第二章に挙げた呉氏らの論に賛同できないゆえんである。

七 むすびに代えて——詩語としての「江南」と「江北」

小稿は、謝靈運「江中の孤嶼に登る」詩初聯の詩語である「江南」「江北」をとりあげた。該詩の初聯「江南は歴覽に倦む、江北は曠かに周旋せん」が、人為の過剰／稀少、倦怠／憧憬、過去／未来、事実／願望という複数の対立軸を内包する反対であることは、前稿に述べたが、初聯の対蹠性に早くから注目していた呉淇の論に不審な点が見られた。その一つが、二句目の「江北」を、一句目の「江南」に先だて、主人公が現実に遊んだ地とすることである（以上、小稿第一、二章）。

呉氏らは、詩の主人公が「先に江北に遊び」はしたが、「江南の景致を欣賞するに急」で「江北」に「久しく遊ばず」、「是こに於いて又た棹を返し江北に遊ばんと欲」したのだとする。当時の謝靈運の位置や足どりを考えれば、沈玉成氏が「作者は先ず江北由り江南に入る」と指摘するとおりである。だから初聯の文言に合わせるために、呉氏らは、江北からやってきた「作者」が、一旦江南に入ってから江北に戻ったことにした。しかし詩句を「作者」の現実の経路を記したものと考えて、彼をむやみに往復させるのは、果たして妥当なのか（第三章）。

謝靈運までの文学作品における「江南」「江北」を調べると、「江南」はまず「招魂」で魂の居るべからざる地とされ、後漢以後の韻文では名品の産地としての豊穡さが強調され、また艶っぽい恋の歌に読みこまれていた。さらに謝靈運の「道路に山中を憶う」詩では、旅人の「断腸」をさそう「歌」でもあった。他方、「江北」の用例は少ない。だが「招魂」で江北は魂の帰るべき所であることが示唆されており、以後曹植詩や「西洲曲」にも、その含意は揺曳していた（第四、五章）。

以上の検討を該詩初聯に重ねれば、一句目「江南は歴覽に倦む」の「江南」は、多様な銘品を産する豊穡の地で、艶っぽい恋歌が流れ、人の感情を動揺させるが、同時にそれは「魂の居るべからざる場所」という含意を持つ。二句目「江北は曠かに周旋せん」の「江北」は、「江南」ほどのなじみや豊かさに乏しいが、しかしそのなじみ

の薄さが、該詩次聯の詩語「新」と「異」を導きだす。さらに「江北」にかすかに揺曳する「魂の帰るべき地」の含意が、三聯目の「孤嶼」で膨らみ、四、五聯目で圧倒的に花開く。「中川に媚し」き「孤嶼」の「雲日相い輝映し、空水共に澄鮮」に、「作者」は自らの魂の帰るべき境涯を見いだす(第六章)。

「江中の孤嶼に登る」詩初聯の詩語は、単に「作者」の現実の足どりに即しているのではないだろう。詩語は、古来用いられ付されてきた含意を、霧や香りのように、幾重にもまとっている。詩人はそれらを最大限に生かしつつ、詩中のまさにそこにしかな存在しえない位置に、詩語を嵌めこんでいく。謝靈運「江中の孤嶼に登る」初聯においても同様であろうことを、示したかった次第である。

* 本研究は科学研究費補助金 18K00344 による研究成果の一部である。

注

- 1) 李善注『文選』(7世紀)では巻26、五臣注『文選』(8世紀初)では巻13、六家注・六臣注では巻26所収。以下『文選』は、足利学校藏明州刊本(人民文学出版社影印2008)を底本とし、尤袤本李善注『文選』(石門図書有限公司影印1976)、『奎章閣所藏六臣注本文選』(다운샘影印1996再版)、『景印宋本五臣集注文選』(宋紹興辛巳建陽陳八郎崇化書房刊本影印本。国立中央図書館1981)を校勘に用いた。ほか、十三経は四部叢刊本と『重聚宋本十三経注疏 附校勘記』(藝文印書館1976年6版)に拠り、正史は百衲本を用いて中華書局標点本を参照し、『藝文類聚』は影宋刊本(中華書局1956)、『初學記』は『日本宮内廳書陵部藏宋元版漢籍影印叢書』第一輯所収影宋本(綫装書局2001)、『世說新語』は影宋本(中華書局重印1999)、『楚辭』の『文選』所収作以外は王逸章句影明本(藝文印書館1974再版)に拠って四部叢刊本を参照し、『樂府詩集』は中津濱涉『樂府詩集の研究』(汲古書院1970)所収影宋本(文学古籍刊行社1955)に拠った。その他は注記のない限り四部叢刊本に拠った。
- 2) 「江北曠周旋」考——謝靈運「江中の孤嶼に登る」詩の読み——(『東北大学中国語学文学論集』第21/22合併号2017)参照。
- 3) 『六朝選詩定論』(汪俊・黃進德点校本、廣陵書社2009)366頁。
- 4) 『汉魏南北朝詩選注』(北京出版社1981)330頁。
- 5) 顧紹柏『謝靈運集校注』(中州古籍出版社1987)84頁。里仁書局2004版も同じ。
- 6) 余冠英編『中国古代山水詩鑒賞辭典』(江苏古籍出版社1989)18~19頁。
- 7) 探索に当たって、臺灣中央研究院漢籍電子文獻の恩恵を蒙った。五経が謝靈運当時の貴族知識人必須の教養であったことは、野間文史『五経入門——中国古典の世界』(研文出版2014)、とくにその325~330頁を参照。
- 8) 「乱」に「獻歲發春兮、汨吾南征。葦蘋齊葉兮、白芷生。路貫廬江兮、左長薄。倚沼畦瀛兮、遙望博。青驪結駟兮、齊千乘。懸火延起兮、玄顔蒸。步及驟處兮、誘騁先。抑鶩若通兮、引車右還。與王趨夢兮、課後先。君王親發兮、憚青兕」。王逸注に「自傷放逐、獨南行也」、「言

屈原放時、葳蕤之草、其葉適齊、…」。

- 9) 「乱」に「朱明承夜兮、時不可以淹。皋蘭被徑兮、斯路漸。湛湛江水兮、上有楓」。
- 10) 「招魂」題注に「宋玉憐哀屈原、忠而斥棄、愁懣山澤、魂魄放佚、厥命將落。故作招魂」。
- 11) 其辭曰、楚靈王既遊雲夢之澤、息於荊臺之上。…於是遂作章華之臺、築乾谿之室。窮木土之技、單珍府之實。舉國營之、數年乃成。設長夜之淫宴、作北里之新聲。於是伍舉知夫陳・蔡之將生謀也。乃作斯賦以諷之。胄高陽之苗胤兮、承聖祖之洪澤。建列藩於南楚兮、等威靈於二伯。…
- 12) それぞれ召南「何彼襍矣」、同「采芣」、小雅「小明」が出典として挙げられる。
- 13) 『楚辭』九歌「湘君」(『文選』卷32)に「采芳洲兮杜若、將以遺兮下女」。ほか「湘夫人」(同)、「大司命」、「山鬼」(『文選』卷33)、「古詩十九首」其の六(同卷29)、同其の九(同)、「古詩」(『藝文類聚』卷81)、曹丕「秋胡行」(同卷41)、張華「情詩」(『文選』卷29)、陸機「擬涉江采芙蓉」(同卷30)、「擬庭中有奇樹」(同)等に見える。
- 14) 王運熙「論吳聲西曲與諧音雙關語」参照。王氏『六朝樂府與民歌』(上海文藝聯合出版1955)所収。
- 15) 聞一多「説魚」参照。『聞一多全集1』(生活・讀書・新知三聯書店1982)所収。「説魚」最末尾136頁に「一九四五、五、二五昆明」とある。
- 16) 李善注に「謝靈運贈宣遠序曰、從兄宣遠、義熙十一年正月作守安城。其年夏贈以此詩、到其年冬有答」。
- 17) 『宋書』卷56謝瞻伝に「尋爲高祖鎮軍・琅邪王大司馬參軍、轉主簿、安成相、…」。『晉書』卷14地理志上に「豫州」の「汝南郡」の「統縣十五」の一つに「安成(侯相)」がある。前注を参照しつつ、表記は正史に従う。なお『晉書』卷10安帝紀や卷85何無忌伝に拠れば、この時の安成侯は何無忌の継承者(嗣子の邕か)であろう。
- 18) 以下、『王力文集』第10卷(山東教育出版社1987)所収「漢語語音史」166頁にある謝靈運詩の「北」の復元音と、186頁にある劉勰賛の「南」の復元音に従う。母音と子音の特徴については、『王力文集』第4卷(山東教育出版社1986)所収「漢語音韻学」46頁「輔音表」、47頁「元音表」「元音図」参照。